

イギリスの外交

目次

- ▶ 第一章 イギリス帝国の植民地支配
 - ▶ 第一節 イギリス帝国の成り立ち
 - ▶ 第二節 パクスブリタニカ
 - ▶ 第三節 孤立と協商
- ▶ 第二章 第一次世界大戦から第二次世界大戦(1914~1946)
 - ▶ 第一節 第一次世界大戦の動向
 - ▶ 第二節 ベルサイユ体制
 - ▶ 第三節 1990年代の危機

第一章 第一節 イギリス帝国の成り立ち

正式名称：グレートブリテン及び北アイルランド連合王国

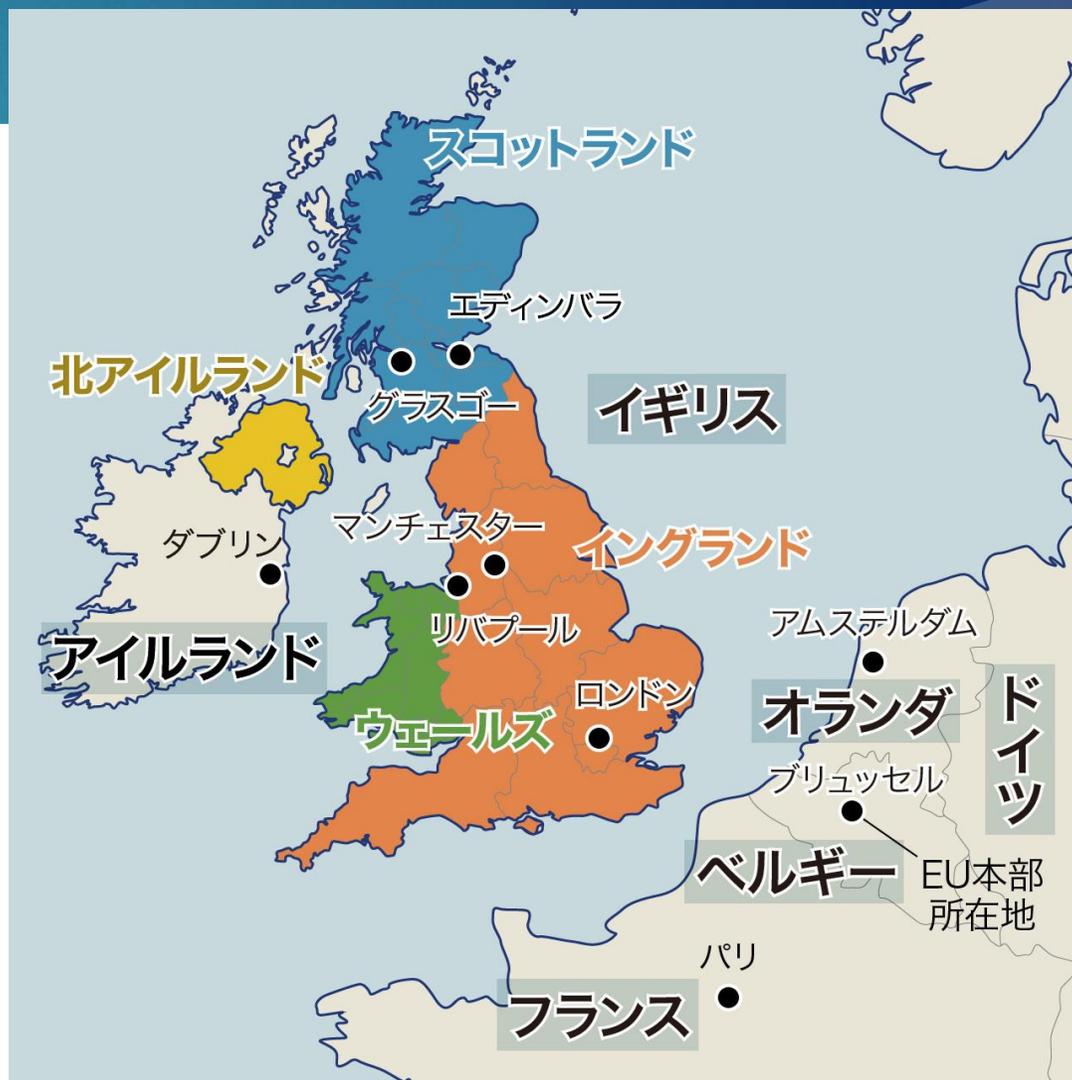
政体：立憲君主制

元首：女王エリザベス二世陛下

面積：24.3万km²(日本の約3分の2)

人口：6708万人(2020年)

首都：ロンドン(人口約902万人、2020年、東京の7割程の面積)



第一節 イギリス帝国の成り立ち

- a) イギリス帝国：18世紀～20世紀末にかけて形成・発展
→全盛期の領土：世界の陸地 約4分の1
- b) 帝国形成：アジア、アフリカ諸外国への植民地拡大の帝国主義
- c) 植民地インド：18世紀中ごろ～20世紀末まで植民地支配
→奴隷貿易、アジアの植民地拡大で重要な拠点

第一節 イギリス帝国の成り立ち

イギリス帝国
は植民地拡大
と貿易拡大に
より発展

a) 1660年～1760年：**イギリス商業革命**(18世紀のイギリス帝国形成に大きな役割)

ア) イギリスの海外貿易額増大による輸出入の増加

イ) 貿易相手国の変化 (昔)欧米諸国→(新)南北アメリカ大陸、アジア諸国

ウ) 貿易商品の変化 (毛織物→絹・綿等の日用品の工業製品の貿易基盤の形成)

第二節 パクスブリタニカ

a) パクスブリタニカ(1850年～1870年)

= 『イギリスによる平和』

b) 18世紀～19世紀はイギリスの海外膨張と帝国形成の転換期

ア) 1776年 アメリカ独立宣言→北米植民地を喪失

→環太平洋諸国中心の重商主義からアジア諸国中心の自由貿易主体に変化

パクスブリタニカ形成には、
植民地インドを中心とした
植民地拡大による経済的安
定と強大な軍事力が背景

イ) 1805年海軍提督ネルソンがフランス・スペイン連合艦隊撃破→この勝利からイギリスの海上覇権が確立

ウ) 1791年フランス領で黒人革命→イギリス領の奴隷貿易が問題視→1833年イギリス帝国内部で奴隷制度廃止

b) インドから中国へ大量のアヘン輸出

→第一次アヘン戦争により中国への貿易拡大

第三節 孤立から協商へ

a) これまでイギリスは同盟国0、植民地経営に注力
→『栄光ある孤立』

b) 外国政治の見直しのきっかけ→1873年、1879年、1890年の経済恐慌からドイツ、アメリカが台頭、イギリスの軍事力の弱さ、日英関係の変化

ア) 1899年 南アフリカ戦争(戦争の長期化), 1900年 義和団事件(日本軍、インド軍の援軍の協力で鎮圧)

第二章 第一節第一次世界大戦の動向

a) 20世紀初頭 欧米ではロシアとオーストリアがバルカン半島めぐり対立→ロシア、イギリス、フランスの『**三国協商**』、オーストリア、ドイツ、イタリア『**三国同盟**』締結

b) 1914年 第一次世界大戦勃発

『三国協商』中心の**連合国** vs 『三国同盟』中心の**同盟国**

c) イギリスの戦闘で、インド軍が最も戦闘員を派兵
→戦闘員、非戦闘員合わせて**約144万人**を動員

第二節 ベルサイユ体制

- a) 第一次世界大戦後のイギリスは欧米の国際秩序安定化に注力
- b) ベルサイユ条約の特質が敗戦国ドイツの弱体化を目的
→ドイツはベルサイユ条約に不満
- c) ドイツの不満解消と欧州の国際秩序安定化のためにイギリス主導で対独宥和

第三節 1930年代の危機

- a) 1929年 世界恐慌→イギリス不況
- b) 1930年代の日英関係は経済摩擦や中国への支配地域をめぐり不安定な状態
- c) ドイツとの関係→宥和外交により友好関係の構築を目指す→ドイツが欧州領土拡張政策を進行
 - 1939年ドイツがポーランドを侵攻
 - 宥和外交決裂→第二次世界大戦が開戦

目次 2

- ▶ 第三章 第二次世界大戦後の経済発展
 - ▶ 第一節 冷戦体制時のイギリス
 - ▶ 第二節 脱植民地化の課題
 - ▶ 第三節 サッチャー政権
- ▶ 第四章 イギリス外交と世界的立ち位置
 - ▶ 第一節 欧米統合とイギリス
 - ▶ 第二節 ブレグジット
 - ▶ 第三節 ブレグジット後のイギリス

第三章 第一節 冷戦体制時のイギリス

- a) 1945年5月ドイツ、8月日本降伏→第二次世界大戦終結
- b) 1947年 アメリカ中心の自由主義国 西側諸国
VS ソ連中心の社会主義国 東側諸国
- c) イギリス→ドイツ統治についてソ連と対立
→アメリカとの協力を模索
- ア) ドイツ(自由主義政権の西ドイツ、社会主義政権の東ドイツ)問題→再統一問題・再軍備問題



冷戦

第三章 第二節 脱植民地化の課題

- a) 第二次世界大戦中から植民地への統率力低下
→脱植民地化
- b) 1947～1948年南アジア、中東各地が独立
1940年代後半は脱植民地化が進行、1950年代は停滞
ア) 脱植民地化が停滞した理由：1950年6月に第一次産品の価格高騰→植民地の経済的価値が上昇
- c) 1960年代植民地のナショナリズムが上昇→脱植民地化加速

第三章 第三節 サッチャー政権

- a) 1979年 サッチャー政権誕生(イギリス初の女性首相)
- b) 思想： **個人の選択を重視**、 **欧州統合に反対** → 国際政治観にも影響

『ブルージュ演説』 → EC (欧州共同体) の補助金がイギリスに多大な負担、国家単位の自由の尊重を強調

ア) ECの補助金制度： ECの歳出の大半が共通農業政策 → イギリスは配当が低 → 補助金に高貢献度が要求

c) 閣僚たちはイギリス孤立を懸念 → 1990年サッチャー解任

第四章 第一節 欧州統合とイギリス

a) 1990年代 欧州統合が進行

ア) 背景：ECの拡大、単一市場の設立

1992年：ヨーロッパ間でヒト・モノ・資本等が非関税で自由行動可能な**単一市場が設立**→欧米統合へ意見が結束

b) 1992年：マーストリヒト条約によりEU(欧州連合)設立
→イギリスも加盟→しかしEUの政策には消極的

第四章 第二節 ブレグジット

a) 2016年：イギリスがEU離脱

「ブリテン」「イグジット(退出)」 = 『ブレグジット』

b) 背景：経済問題、移民問題

ア) 2008年のリーマン・ショックの影響で不況&ユーロ危機で輸出力が低下

イ) EU加盟国と非EU加盟国から2004年以降年50万人の移民が流入→移民増加で雇用が圧迫、治安悪化→反EU世論増加

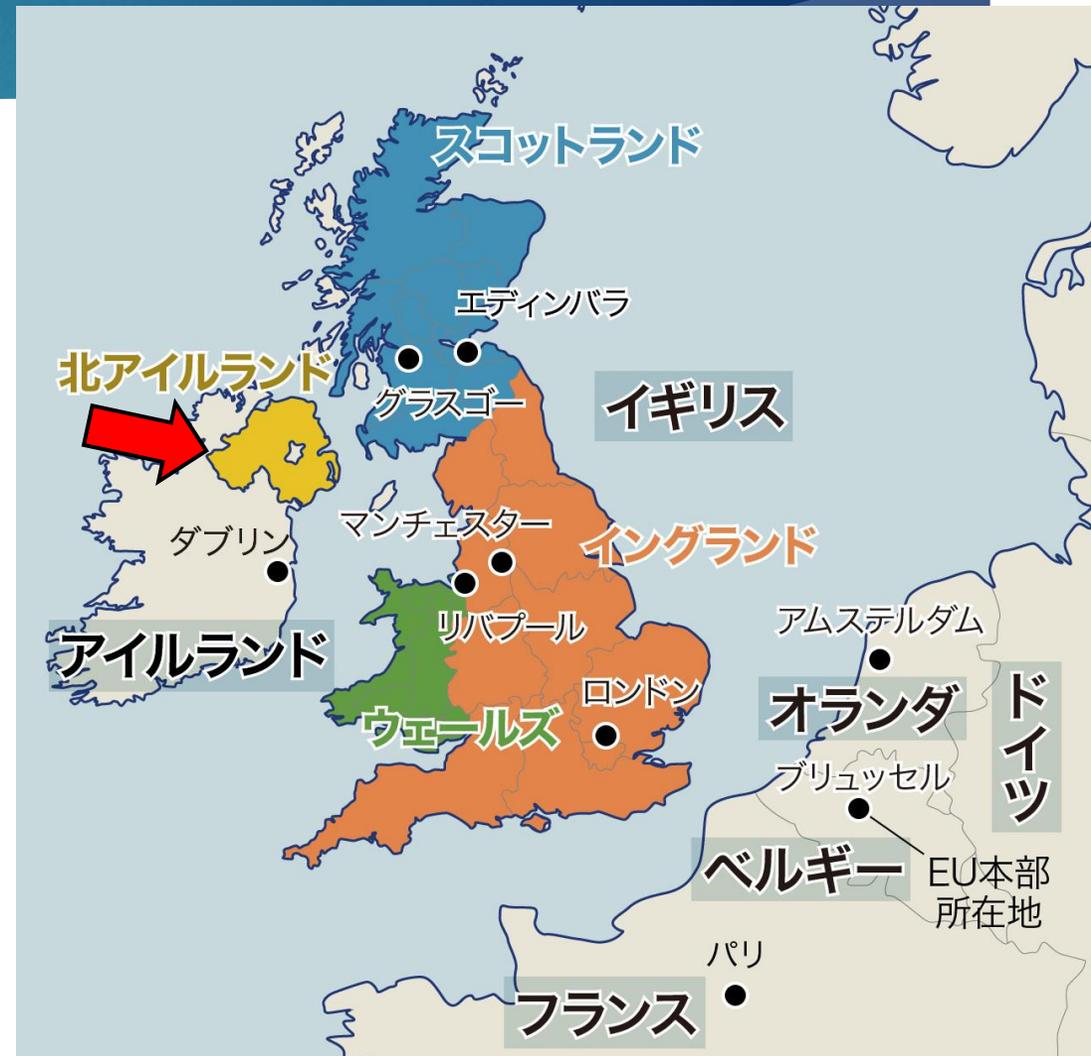
第四章 第三節 ブレグジット後のイギリス

a) イギリスは4つの領域で構成→
領域内でEU離脱について意見が対立

b) イングランドとウェールズでは
離脱多数

スコットランドと北アイルランドでは
残留多数

国境問題：人・物の自由行動が懸念



今後の展望

- a) 各領域でEUからの経済的恩恵に差→EU離脱に意見が対立
- b) スコットランドは独立後、EUに再加入
→農業の割合が高いためEUから経済的恩恵を獲得
- c) 北アイルランド：EU加盟国のアイルランド共和国と北アイルランドを統一→EUから政治的、経済的支援で安定化